アマチュア演劇を生きる（その１）
― 鳥取県立図書館難波忠男寄贈資料から ―

五島 朋子

An Amateur Theatre History in Tottori (Part 1)
Based On ‘Tadao Namba Resources’ Donated to Tottori Prefectural Library

GOTO Tomoko

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第18巻　第3号　抜刷
REGIONAL STUDIES（TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES）Vol. 18 / No. 3
令和４年 3月25日発行　March 25, 2022

アマチュア演劇を生きる（その１）

― 鳥取県立図書館難波忠男寄贈資料から ―

五島朋子*

An Amateur Theatre History in Tottori (Part 1)
Based On ‘Tadao Namba Resources’ Donated to Tottori Prefectural Library

GOTO Tomoko*

キーワード：アマチュア演劇，鳥取市民劇場，NHK 鳥取放送劇団，地域演劇，難波忠男
Key Words: Amateur Theatre, “Tottori Citizen’s Theatre”, “NHK Broadcast Theatre Group”, Regional Theatre, Tadao Namba

Ⅰ．はじめに：アマチュア演劇と地域

地元鳥取で活動するアマチュア劇団の公演を観劇したのは，2019 年 1 月 27 日の「第 45 回鳥取県演劇連盟合同公演」が最後ではないかと思う[1]。5 つのショートストーリーを 2,3 人の役者で次々と演じるものだが，朗読に少し演技も加えたリーディング公演だった。舞台に登場した役者は 9 人，主に連盟に名前を連ねる劇団関係者が参加していた。「演劇公演」と呼ぶにはささやかな上演に，一つの演劇作品を上演するだけの人も時間も費用もエネルギーも鳥取から消えようとしているのだろうか，いやそもそも鳥取に限らず「劇団」という集団の維持が時代に合わなくなっているのかもしれない，と少し淋しい思いで客席を後にした記憶がある。それを最後に，鳥取市のアマチュア劇団の活動について，鳥取大学の演劇サークルの公演を除けば，公演の情報を得ることができていない[2]。

ところで最近演劇学の分野から，アマチュア演劇の特に地方での活動に目を向けた研究成果の刊行が相次いだ。小川史著『1940 年代素人演劇史論－表現活動の教育的意義』(2021 年 3 月・春風社)，須川渡著『戦後日本のコミュニティ・シアター－特別でない「私たち」の演劇』(2021 年 11 月・春風社)，日比野啓編著『「地域市民演劇」の現在－芸術と社会の新しい結びつき』(2022 年 3 月・森話社）である。小川は，明治末期に民衆による芸術として概念が生まれた「素人演劇」に注目し，特に 1940 年代の戦前から戦後期間において，その特性がどのように変遷していったのかを，当時の演劇をめぐる政策，演劇専門家の発言と役割，各地の職場演劇や農村演劇の具体的な事例を戯曲内容にも触れながら詳細に検討している。「素人演劇」を現代の視点から再検討するとともに，戦後 1940 年代後半の「素人演劇」の実践の中に，演劇という表現活動が持つ，参加者の内発的な変化を促すような教育的な意義があったことを解き明かしている。須川の論考は，地方都市のアマチュア演劇の活動として，岩手県西和賀町（旧湯田町）で 1950 年に創立され，現在も活動する劇団「ぶどう座」を取り上げ，劇団と地域社会の関わり，劇団主宰者川村光夫（1922 年生まれ，2020 年没）の戯曲作品の分析も含めながら，農村演劇を出発点とする地域のアマチュアの演劇活動を，特に「コミュニティ・シアター」という観点から日本演劇史に位置付けなおそうとする。小川が対象とした 1940 年代後半，戦後の「素人演劇」の具体例の一つとして，ぶどう座が岩手県の小さな町でどのような演劇活動をしながら現代まで生き抜いてきたのかを，本書は詳細に記したものと言える。

*鳥取大学地域学部国際地域文化コース・地域学部附属芸術文化センター

日比野ら8人の執筆者は科研費の研究グループとして，2010年代以降の現在，演劇を職業としないアマチュアによる演劇実践を包括的に把握しようと全国各地を対象に調査を続けており，その成果の一部としてまとめられた論集が『「地域市民演劇」の現在』である[3]。沖縄の中高生による「現代版組踊」，宝塚に影響を受けた劇団・グループの活動（北海道や福岡），学習塾による演劇創造（埼玉），釜ヶ崎の紙芝居集団「むすび」（大阪）などを取り上げ，自治体やNPO法人，教育機関など地域の様々な主体との関係と絡めながら，アマチュアの多様な演劇実践を論じている。

日比野による総論[4]を参照し，アマチュアの演劇活動の盛衰をここでは以下のように簡潔にまとめておく。アマチュアの演劇活動は，戦前はナショナリズムを高揚させるため「国民演劇構想」の一つとして「素人演劇」が注目されたが，戦後は新劇運動の地域や職場への広がりから「自立演劇」（サークル，職場，青年団など，既存のコミュニティにおけるアマチュアの演劇活動）として1950-60年代に活発化する。しかし，多様な余暇の楽しみやアングラ演劇など新しい表現も生まれ，新劇の影響を受けたこのようなアマチュア演劇活動は衰退し，80年代以降，社会・経済・政治などの変化も影響しながら，新たなアマチュアの演劇活動が，各地で様々な表現形態で展開している。

それでは，鳥取の戦後アマチュアの演劇活動は，こうした日本のアマチュア演劇の活動とどのようにリンクし，また鳥取独自の何か特色を持っていたのだろうか。そもそも，鳥取にはどのようなアマチュア演劇の活動があったのか。近年のアマチュア演劇研究の成果を参照しながら，まずは鳥取市における戦後の演劇の活動に関する文献・資料・情報を収集しつつ，活動を担った人々の来歴，作品上演の特徴や変遷，またこれらの活動が地域内外でどのような関係性を作り出し，地域の文化環境の醸成においてどのような役割を担ったのかを明らかにすることが，演劇研究の豊富化，ひいては地域の文化史の拡充に必要と思われる。本稿は，そのための基礎資料として，鳥取県立図書館に寄贈された難波忠男の演劇関連資料の調査成果，および，1965年に劇団「鳥取市民劇場」を結成し，亡くなるまで代表を務めた氏の前半生について紹介する。

Ⅱ．鳥取のアマチュア演劇

鳥取県内の戦後アマチュア演劇のうち，一定期間活動した劇団については，①日本海新聞連載記事「演劇グループの歩み　舞台盛衰記」（掲載期間：1980年9月23日～1982年6月8日・連載80回），②『鳥取文芸 15号 特集鳥取の演劇』（1993年），③日本海新聞連載記事「舞台にかける夢　地域演劇の半世紀」（掲載期間1998年5月22日～10月30日・連載23回）で名前と活動がある程度確認できる。

①では8つの劇団・グループが取り上げられ，誕生の経緯から執筆時点までの活動を劇団代表者などが10回ずつ執筆しており，各劇団の活動記録としてまとまっている。劇団名（執筆者，掲載期間）は，掲載順に鳥取市の「鳥取演劇集団」（代表・砂川哲夫，1980年9月23日～11月25日），米子市の「演劇集団あり」（事務局・宮倉義文，12月2日～1981年2月3日），「倉吉演劇集団零（ゼロ）」（脚本と演出担当・いとおけいめい，2月10日～4月14日），「鳥取市民劇場」（代表・難波忠男，4月21日～6月23日），日南町の「劇団あざみ」（座員・久代安敏，6月30日～9月8日），米子市の「座・ユリイカ」（副代表・若原立良が9回まで，10回は代表・別所清平，9月15日～12月1日），鳥取市の「人形劇団こうま」（主宰・佐藤真佐紀，12月8日～1982年3月9日），境港市の「劇団いさりび」（代表・石橋文夫，4月6日～6月8日）である。これら8劇団は1946年から1977年の間に創設されたもので，活動のバックグラウンドや結成の契機としては，NHK放送劇団や職場演劇（旧国鉄など）を前身とするもの，同和教育の推進や児童文化への貢献を目的とするもの，青年団活動の一環などで，時代的な影響を色濃く反映している。同時代の複数の劇団について，このように長期にわたる連載記事が成立するということは，1980年代初頭はアマチュアの演劇活動が，鳥取においても地域の文化活動として一定程度存在感を持っていたということであり，また，戦後の新劇運動の影響を受けたアマチュア演劇の活動がなんとか命脈を保っていたということを示している。

1993年の②では「鳥取演劇集団」（以降，「集団」と記す）の代表砂川が，1946年に結成された劇団の47年の歩みを振り返る中で，鳥取のアマチュア劇団についても記述している[5]。「集団」の活発な活動が刺激となって，米子市に「山羊座」，「創作座米子協同劇団」，「劇団アルス」などの創立が相次ぎ，これらを戦後第1次世代と名付けている。第2次世代が「はまなす」（鳥取市），「ざっこ」（倉吉市），「鳥取市民劇場」（以降，「市民劇場」と記す），「あり」，「座・ユリイカ」で，そのうち1993年時点も活動が続いているのは，「集団」，「市民劇場」，「あり」の3劇団の

みという。昭和 50 年代に入ると，鳥取市に「どっこいしょ」と「でこにた」[6]，前出の「零」，「いさり火」，「あざみ」が誕生したものの，活動しているのは「でこにた」のみと，地方都市で劇団活動を継続することの困難を指摘する。このほか，平成に入って創立された米子市の若手劇団「ファクトリー」を挙げている。特集号では，もう一人大倉克敏[7]が，鳥取の若手演劇グループとして 1989 年に結成された「サークル・キホーテ」を紹介しているが，学生中心の活動であったこともありこの時既に解散している[8]。

1998 年の③は日本海新聞記者高取正人が，「舞台にかける夢 地域演劇の半世紀」と題して 23 回にわたり連載執筆したものである。第１回を「前史・戦前の演劇運動」と題し，戦前の鳥取にもアマチュア演劇の活動が存在したことに触れている。掲載順に以降の記事タイトルを記す。「鳥取演劇集団（上）・（下）」「山羊座」「アルス（米子の学生演劇集団）」，「ぐみ」「ざっこ」「はまなす」「鳥取市民劇場」「座・ユリイカ」「あり」「鳥取県演劇連盟」「零」「あざみ」「でこにた」「夢 ORES（オーズ）」「劇団運営の現状」「演劇鑑賞会運動（上）・（下）」「市民劇の系譜（上）・（下）」「おやこ劇場運動」「おわりに」と劇団の活動に加えて，市民主体の創作劇（「市民劇」）やミュージカル上演，さらに鑑賞者側の団体も含めるなど，演じる側だけでなく広い視点から「地域演劇」を語る。1980 年初めには活動がなくなっていたため①では記述がなかった「山羊座」，「アルス」，「ぐみ」，「ざっこ」，「はまなす」についても，この連載で概要を知ることができる。また，連載中もっとも若い劇団が 1995 年結成の「夢 ORES」（代表・森本孝文）で，砂川の「集団」を脱退して新たに劇団を創設し，平田オリザの「静かな演劇」に影響を受けた作品を上演する他，東京公演を打ち，県外の演劇関係者や団体と連携を広げるなど野心的に活動していることが紹介されている。高取による連載記事は，鳥取の演劇活動を地域演劇の通史として編もうとする試みだったが，これ以降，管見の限りでは鳥取の演劇活動を振り返るまとまった記述は見当たらない。

以上の記事から，鳥取県内の主だったアマチュア劇団とその活動内容を把握することができる。劇団の設立は旗揚げ公演もあり，明確に立ち上げ年月を示すことは可能だが，解散式や休止宣言でもしない限り，活動の終わりを特定するのは難しい。冒頭に触れた「鳥取県演劇連盟」は，1973 年 12 月鳥取県下の６劇団（「集団」，「市民劇場」，「倉吉演劇集団ざっこ」，「演劇集団ユリイカ」，「劇団ぐみ」，「演劇集団あり」）によって，「諸劇団の親睦と演劇を通じて地域文化に寄与することを願って」結成されたものだ[9]。2022 年現在，連盟には「集団」，「市民劇場」，「あり」，倉吉市の「劇創西社 OHKUS（オークス）」という 4 つの劇団が名前を連ねている。実際の上演活動は低調のようだが，1946 年創立の「集団」がもっとも古く，1965 年創立の「市民劇場」が２番目に活動歴の長いアマチュア劇団ということになる。「集団」については，劇団から『鳥取演劇集団 30 年小史』（砂川哲夫編著，1978 年），『鳥取演劇集団 53 年史』（砂川哲夫・本城美佐子編，2003 年）と 2 度刊行された他，2005 年には砂川が鳥取県文化功労賞を受賞し劇団の活動を振り返る資料展示も行われている。また砂川自身が脚本執筆に加えて演劇に関する文章も多く書き残しており，劇団活動の来歴，主宰者の演出や地域での演劇活動に対する考え方などを知ることができる。「市民劇場」については，残念ながらその活動に関してまとまった文章はないが，劇団創設者で，1996 年 9 月 26 日に 71 歳で亡くなるまで劇団代表を務めた難波忠男（1926 年 5 月 13 日生まれ）の所蔵資料が，鳥取県立図書館にまとめて寄贈されていることが分かった。寄贈資料のうち書籍・雑誌などの出版物は，整理され閲覧貸借可能となっていたが，難波自身が携わった演劇活動に関する多様な資料と演劇を中心とした文化活動に関する新聞記事のスクラップなど大量の資料は整理途中のままということであった。県立図書館の協力と了解を得て，筆者は 2020 年 6 月より寄贈資料の整理･調査させていただいており，次章ではその資料概要を紹介する。

Ⅲ．鳥取県立図書館所蔵難波忠男寄贈資料の概要

１．書籍・雑誌・台本

1998 年 11 月 12 日付け日本海新聞記事が，「県立図書館に寄贈／故難波さんの膨大な演劇資料／舞台写真，パンフ，ビデオ，本・・・・」と題し，難波の寄贈資料を写真入りで大きく取り上げている。記事は資料の内訳を「100 冊以上にもなるスクラップブック，舞台を収録したビデオ 38 本，約 400 冊にのぼる演劇関係の本や雑誌など」，スクラップの具体的な内容を「鳥取市民劇場の母体となった NHK 鳥取放送劇団の昭和 28 年から 38 年にかけての定期公演や，鳥取市民劇場の初公演以来の舞台写真，パンフレット，チラシ，台本などが年代順に整理されている」ほか，「同 49 年から毎年開かれている県演劇連盟公演に参加した座・ユリイカ，あり，ぐみなどの劇団の舞台や，反省会など舞台裏の様子を撮影した写真も大量に残されて」いると紹介している[10]。

寄贈資料のうち書籍と雑誌については，図書館が「難波氏寄贈図書一覧」というリストを作成している[11]。このリストに，受け入れ登録済みの書籍 228 冊，雑誌 858 冊が記載されているが，一部反映されていない図書もあり[12]，実際には千数百点の書籍・雑誌が寄贈されている。書籍には，未来社，青雲書房などにより刊行された一幕劇集，学校・サークル演劇，青年演劇といったタイトルの戯曲集が多数含まれている。これらは，戦後の新劇運動の影響を受けて職場や地域に広がったアマチュア演劇のために劇作家が書いた戯曲，自立劇団や青年演劇の活動から生まれた戯曲を書籍化したものである。アマチュア演劇は，上演場所，出演人数，舞台機構，演技力，予算など，本格的な劇場でプロが上演する舞台からすれば多くの制約があり，演劇の専門家も，アマチュアの実践者もこのような「一幕物」の上演を前提としていたことが分かる。またこれら書籍一覧は難波自身が，鳥取での演劇活動で，どのような戯曲を選択しようとしていたか，または選択せざるを得なかったかを示してもいる。

「難波氏寄贈図書一覧」の雑誌には，『新劇』（白水社）[13]のうち 1954 年創刊号および，一部欠号はあるが 1968 年から 1992 年休刊の 478 号まで，同じく『テアトロ』（カモミール社）が 1970 年から 1996 年まで（一部欠号あり），『悲劇喜劇』（早川書房）1971 年から 1990 年まで（一部欠号あり）があり，戦後現代演劇の主要雑誌を難波は購読していたことが分かる。また，横浜演劇研究所による『アマチュア演劇』（1965 年創刊）も一部欠号があるが 1960 年代後半から 1993 年まで，全国児童演劇協議会刊行『季刊げき』72 年から 95 年までが寄贈されている。

このほか，図書館が整理した「難波氏寄贈資料リスト」として，「雑誌掲載シナリオ」「台本」「その他」がある。「雑誌掲載シナリオ」は，主に文芸雑誌から当該作品だけを切り取ったもので，リストには 67 作品がある。1970 年代から 1980 年代に発行された『文藝』，『海』，『群像』，『新潮』，『すばる』など様々な雑誌名が確認できる。矢代静一の戯曲が「写楽考」（1971 年『文芸』）など 8 編，唐十郎の戯曲が「愛の乞食」（1970 年『海』）など 5 編と多いが，他は国内外の作家のものが 1，2 編ずつである。「台本」リストは，こうした雑誌戯曲などを複写し綴じたもので，作品数にして 143 件整理されている。10 ページ未満の短いコントや，同じものが複数部数作成されていることから，劇団の稽古や上演検討のために用意されたものであろう。

「難波氏寄贈資料リスト（その他）」は，地方のアマチュア演劇のかつての隆盛を示す興味深い資料である。内容は，鳥取県内各地域の青年団や職場サークルが，「青年大会」に出場するために書いた手書き台本のコピー91 件である。リスト未掲載の台本が残っていることを確認しているので，実際の件数はまだ多い。智頭，佐治，八頭，用瀬，若桜，湖南など鳥取県東部地域の青年団が大半だが，日野郡や米子の名前も混じっている。年代が確認できた台本のうち，古いものは 1971 年，新しいところでは 1988 年がある。「青年大会」は，1951 年に結成された日本青年団協議会が，各地の青年団のスポーツ・文化活動の「全国青年大会」として 1952 年から開催するようになったもので，参加者は減っているものの，現在も大会は年に 1 回秋に東京で開催されている。現在は「舞台発表」として括られているが，かつては文化の部に「演劇」の分野があり，多くの都道府県青年団が参加していた。青年団活動が盛んであった昭和 50 年代は各地域地区でまず演劇発表が行われ，上位の選ばれた団体が県の青年大会で上演，そこで優勝した団体がさらに全国青年大会に出場する。難波や砂川は，各地区青年大会の演劇分野の審査員を務めており，青年団が執筆した戯曲をあらかじめ読んだ上で，上演審査を行っていた。次項で触れる新聞記事スクラップブックにも，青年団の演劇活動に関する記事が多数あり，地域におけるアマチュア演劇運動の一画を占めていた時代があったことが分かる。

以上，書籍，雑誌，戯曲抜粋コピー（「雑誌掲載シナリオ」「台本」）からは，1950 年代後半から鳥取のアマチュア演劇活動に携わった難波の関心領域が見てとれる。同時に，これらの書籍，演劇雑誌，雑誌の戯曲，複写台本，青年団の台本を，集め，整理し，所蔵し続けた，難波の演劇活動に対する執念と粘り強さを示している。それは，以降紹介する資料にも一貫している。

２．スクラップブック

スクラップブックは大きく二つに分類できる。一つは「市民劇場」を中心として難波自身が携わった舞台に関するものが 23 冊，もう一つは新聞記事のスクラップブック 71 冊である。前者の内訳は①難波が 1952 年から参加した「NHK 鳥取放送劇団」（以降，「放送劇団」と記す）の舞台公演の全 8 回の記録が 1 冊，②「放送劇団」解散後，1965 年に結成された「市民劇場」の公演に関する記録が 5 冊，③「鳥取県演劇連盟」の公演に関する記録が 2 冊，④「放送劇団」および「市民劇場」の公演写真が 3 冊，④残り 13

冊は，様々な団体・市民が参加して上演した創作劇（「市民劇」），難波が晩年まで指導した朗読グループ「ひまわりの会」などの記録である。スクラップブックには，公演プログラム，チラシ，ポスター，チケットなどの現物，台本，舞台図，収支計画書，後援依頼文書，打ち合わせ議事録，衣装プラン，新聞記事，関係記事掲載雑誌，公演写真，打ち上げの案内など実に様々な資料が，丁寧に貼り付けられている。中には他劇団からの公演に対する「祝電」や「入場税」納付の書類など，時代を感じさせる興味深いものもある。公演の企画，上演，その後の評価まで，難波が携わった演劇活動の詳細を伝えるだけでなく，鳥取のアマチュア演劇の活動に関する貴重な一次資料である。

スクラップブックは，コクヨ製 A3 版，1 冊 56 ページのもので，新聞記事のスクラップブックには，1 から 71 まで通し番号が記されている。1969 年 12 月から 1995 年 9 月までのざっと 26 年分になる。スクラップブックはさらに「山陰関係」（12 冊），「舞台・俳優」（27 冊），「文芸・戯曲・他」（30 冊，うち 1 冊は「文芸・戯曲（若者）」）と大きく分類されている[14]。記事はきれいに切り取られ，掲載年月日がスタンプされている。おおよそ日にち順に貼り付けられているが，連載記事の場合はまとめて同じページに貼られていることが多い。難波は，切り取った記事がある程度まとまったところで，整理しながらスクラップブックに貼り付けていたのだろう。記事には誌名の記載がほとんどないが，一部のメモ書きや内容から，地方紙の日本海新聞や山陰中央新報だけでなく，朝日，毎日，読売，サンケイなど全国紙の記事も含まれていることが分かる。

ひとまず「山陰関係」12 冊に目を通したところだが，内容は，プロアマ問わず鳥取を中心に時には島根を含む演劇公演に関する前記事・公演評，文化施設，伝統芸能，映画・文学などの記事のほか，演劇に関連する小さなコラムも保存されている。これらのスクラップブックからは，難波の几帳面さと同時に，演劇という分野への終生衰えることのなかった情熱と執念を改めて感じる。

「山陰関係」にまとめられた記事を読むと，鳥取市に限らず鳥取県内の各地で，実に様々な人々が多様な舞台活動の実践に関わっていたことに驚かされる。それらは例えば以下のような演劇実践である。①青年団における演劇活動，②地域の伝統芸能（地歌舞伎や人形芝居の復活），③集落の高齢者による芝居上演，④企業や職場の福利厚生活動としての舞台発表（演劇鑑賞ではなく，自ら演じるもの），⑤障害を持つ子供たちによる演劇活動（具体的には盲学校の事例），⑥高校演劇，⑦社会人による人形劇団，⑧演劇鑑賞会による舞台（具体的には「この子たちの夏」）などである。新聞記事スクラップには，鳥取で活動する音楽，映画，文芸などの分野の団体や人々の記事も保存されている。スクラップされた記事は，あくまでも難波の関心に沿ったものであって，鳥取の当時の文化分野全てが網羅されているわけではないが，1960 年代から 1990 年代初めにかけての鳥取の文化活動のインデックスの役割を持っている。

３. 公演プログラム・チラシ他

以上の書籍・雑誌やスクラップブック以外に，演劇公演のチラシ・プログラム，劇団の機関紙等が寄贈資料に含まれている。難波が封筒に分類して保存していたもので，筆者が図書館で確認したところでは，①鳥取を拠点に活動していた劇団・グループの公演プログラム・機関紙が 82 件（「集団」，「市民劇」，「芝居屋でこにた」，「あり」，「ざっこ」，「はまなす」など）がある。そのほか，②難波自身が学生時代に携わった演劇公演のプログラムやチラシ，③鳥取大学演劇サークルの公演プログラム，④その他，難波が在京時代から亡くなるまでの間に足を運んだと思われる演劇公演・コンサートなどのプログラム（未整理）など 4 つのカテゴリーに分類できる。このうち，最も古い資料は旧制松江高等学校在学時に難波が参加した演劇公演の 1 枚もののプログラムで，②のカテゴリーに分類した。1946 年 11 月 2 日に行われた旧制松江高校開校記念公演のプログラム（A4 1 枚二つ折り・両面印刷）で，「アルト・ハイデルベルク」を上演し，難波も出演している。難波自身が参加した舞台の記録としても最も古いものである。また 1949 年に難波が入学した，舞台芸術学院での舞台発表のプログラムや公演活動に関する資料が確認できた。具体的には，1950 年の「本科 1 期生卒業式公演」プログラムから 1955 年発行の『舞芸ニュース 3 号』までの 12 件である[15]。舞台芸術学院は，戦後間もなく 1948 年に創設された俳優養成の専門学校で，現在まで多くの舞台関係者を輩出している。今も創立当初の場所に近い東京都豊島区池袋に立地しているが，1959 年 10 月 1 日に校舎が出火し全焼しているため，難波が残したこれらの資料は，舞台芸術学院の草創期の教育と演劇活動の一端を伺い知ることのできる貴重な資料と思われる。

③の鳥取大学演劇サークルについては，最も古いものが 1950 年，最新は 1993 年の計 23 件が確認できた。これらのプログラムに記載されている足跡を見

ると，新制の鳥取大学開学以前の 1948 年に「鳥取学生演劇愛好会」が結成されており，1950 年には医学部，1953 年には学芸学部（1966 年に教育学部へ改称），1955 年に農学部で，それぞれの演劇部が第 1 回目の公演を行っている。1950 年代は，大学生の演劇活動も盛んであったことがうかがえる。鳥取大学のこれら 3 劇団による合同公演のプログラムも残っている。また，1960 年代には，「全山陰大学演劇連盟」として，鳥取，島根の大学（短大を含む）の演劇部による公演活動も行われていた。演劇部所属学生の中には，大学の枠を超えて「集団」や「市民劇場」などの公演に参加するものもおり，社会人のアマチュア演劇との交流もあった。大学のサークル活動は，毎年学生が入れ替わり，資料の保管・維持が難しいため，これらの公演に関する記録は，鳥取の演劇活動の一端を知る上で貴重なものである。

④のその他未整理資料には，県外の劇団（例えば劇団四季，山口県のはぐるま座，NHK 札幌放送劇団，東京や関西の新劇系の劇団）の公演プログラム・機関紙のほか，毎年開催される鳥取県内高校演劇大会のプログラム，鳥取演劇鑑賞会の機関紙，鳥取県内で行われた演劇や音楽など舞台系のイベントの印刷物[16]などが残されているが，詳細は他日に譲る。

４．アマチュア演劇のインデックスとして

以上のように難波の寄贈資料は全体として，1950 年代後半から 1990 年代にかけての，鳥取における主にアマチュア演劇の活動について網羅的に伝えるものである。特に，これまで詳細が把握されていなかった「NHK 鳥取放送劇団」の演劇活動，難波が代表として率いた「鳥取市民劇場」の活動，鳥取県内劇団の連携組織「鳥取県演劇連盟」の活動に関する一次資料として貴重なものである。また，鳥取市を中心に活動する様々な分野の文化活動団体が参画して，鳥取を素材にした舞台作品を創作・上演してきた「市民劇」について，そのプロジェクト立ち上げの契機から上演までのプロセス，多くの関係者を巻き込んだ盛り上がりについて検討できる重要な資料である。その他に，高校や集落といったコミュニティを基盤とした活動，演劇経験のある U ターン者や東京の専門家の指導による単発のあるいは短期間の演劇活動など，地域におけるアマチュア演劇の活動を把握するために，様々な観点を提供してくれる。同時に，これらの資料を手がかりに，当時の日本各地のアマチュア演劇活動を取り巻く共通の課題や，逆に鳥取独自の特色を抽出していくことも可能だ。「全国青年大会」や全国高等学校演劇大会といった社会教育・学校教育の全国的なコンクール制度や，公立文化施設の整備といった文化施策の展開など，国の政策や自治体文化行政と，鳥取のような地方都市の演劇活動との影響関係について検討することもできる。1990 年代前半は，公立文化施設の整備以外には，まだ国や自治体による芸術文化政策や補助制度が充実しておらず[17]，難波が残した資料から，こうした政策や制度以前の演劇文化振興が，地域の多様な組織や市民によって担われていたことも読み取れる。さらに，アマチュアによる演劇活動の，演劇創造そのものにおける意義や市民の文化意識・文化環境の醸成における役割などについても示唆を与えてくれる。

Ⅳ．難波忠男の演劇人生―２度目の帰郷まで

1. 演劇との出会い

本章では，難波の前半生について，スクラップブックに残されていた新聞記事を手がかりに，現時点までの資料調査と関係者へのインタビューをもとに紹介する[18]。

難波は，父信義，母菊子の元に 1926 年鳥取県岩美町に生まれた。信義とその家族について，1936 年発行の『帝國現代人物誌續編』(pp. 168-169) に詳しい記載がある。信義は 1886（明治 19）年，岩美町岩井町真名の半次郎の三男に生まれ，鳥取県師範を 1909 年に卒業した後，浦富小学校他数々の教育職を務めた功績多い人物で，俳句，囲碁，テニスの趣味を持つという。菊子との間に四男三女(上から順に文男，千枝子，一子，道男，國男，忠男，成子）をもうけている。1910 年生まれの長男・文男は，記事によれば，東京の日本大学高等師範部に在籍中，また長女千枝子は小学校教員，次女一子は幼稚園に勤務とあり，教職一家であったことが伺える。年代は不明だが，戦前に信義は鳥取市馬場町に家を購入し岩美町より転出，1942 年には鳥取市東町にあった鳥取県教育会に勤務している[19]。

難波は，小学校 5 年生の時に学芸会で「弥次喜多道中記」[20]を演じ拍手喝采の大好評を得て，翌年は老人会や子供会のアトラクションに呼ばれて，40 数回も演じたという。この時に人前で演じることの魅力にとりつかれた[21]。難波の没後，「市民劇場」や交流のあった演劇関係者による追悼イベント「鎮魂の夏」が開催され，その際挨拶に立った姉の一子も，「小学生の頃から劇が好きで」と証言している[22]。戦時体制が強化される中で過ごした旧制中学校時代には，演劇を上演する機会はなかったようだ。旧制鳥取県立鳥取第一中学校（現在の鳥取県立鳥取西高

等学校）を卒業後[23]，1945 年に旧制松江高等学校第 25 期「理甲一組」に進学する。この年は秋に復員兵の入学や復帰もあり，1 学年に 286 名もが在籍していた[24]。1948 年 3 月 10 日卒業時の 25 期生の集合写真は，生徒数が多く顔の判別も難しい[25]。

旧制高校在学中，同好の士を得て難波は演劇部に参加する。演劇部は，音楽部や文芸部のような「公式」の部活動ではなく[26]，また戦後になって結成されている。同窓会誌『嵩のふもとに』には，24 期生（1947 年春卒業生）の菊池勝が「昭和 21 年演劇部を創設，記念祭にアルトハイデルベルグ演出」と紹介されている[27]。旧制松江高等学校では，1922 年から戦中を除いて毎年 11 月 2 日，3 日に開校を記念する「記念祭」が開催されていた。1946 年の記念祭「第 25 回淞高開校記念祭記念公演プログラム」を難波は大切にとっていた。プログラムには，音楽部による合唱やハーモニカバンド，ピアノ演奏のほか，「淞高演劇同好会第３回研究発表」として「アルト・ハイデルベルク」上演のスタッフ，配役，作品解説が掲載されている。配役 17 名（難波は「宮内卿フォン・パサルヂュ男爵」役と記載されている）のうち女優 2 名は，当時松江に設立された「みづほ演劇研究生」である[28]。出演者名と『嵩のふもとに』に記載されている各期各クラス各人の「個人略伝」（氏名・原籍地・出身校・卒業大学名・卒業年・学位取得年と，100 字の紹介が記載されている）を照合してみたところ，24 期と 25 期の理科の学生の参加が多く，文科の生徒は 2 名のみだった[29]。翌年の記念祭では「アルルの女」が，「松江女専」（昭和 21 年に創設された島根県立松江女子専門学校）と合同で上演されている。旧制高校が男子生徒だけだったことも，大きな動機だったのではと邪推も働くが，松江女専との合同公演は何度も行われたという[30]。シェイクスピアやゴーゴリなど3時間も4時間もかかる長い舞台を，在学の 3 年間に 10 回も公演したと，難波自身も書いており[31]，演劇という表現は，戦争の重圧から解放された若者たちにとって，大きなエネルギーをぶつけられる活動だったのだろう。

難波は 1948 年 3 月に旧制松江高等学校を卒業，鳥取の実家に戻る。鳥取市馬場町の家には，両親のほか長男の文男家族と未婚のきょうだいが一緒に住んでいた。難波は「役所勤め」をしていたが，1 年がかりで父を説得し上京する[32]。文男の長男で，難波と一緒に暮らしたこともある信之氏（1940 年生まれ）によると京都大学を受験するも失敗[33]，しばらく「代用教員」として働いていたとのことである。舞台芸術学院の開校は 1948 年 9 月なので，いずれにせよ難波は学院の設立をかなり早い時期から知り上京を思い立っている。

２．プロを目指して上京

1948 年に開校した舞台芸術学院は，秋田雨雀を校長に，土方与志，千田是也ら戦前から日本の新劇運動を推進してきた錚々たるメンバーが講師として俳優教育に携わっていた。都知事の認可を受けた個人設立の各種学校で，2 年制の本科と夜間 6 ヶ月制の講習科とを併設していた[34]。後者は特に，戦後盛んになった職場や学校のサークル演劇活動家の養成を目的としていた[35]。1 年のうちに講習科の卒業が 2 回，本科が毎年卒業していくため，学院ではこれら各コースの学生による中間発表や，実習，卒業公演が頻繁に行われていた。

同窓会名簿によれば[36]，難波は 1949 年に講習科 3 期（47 名）入学，その後 1950 年 7 月に本科 2 期(43 名)に進学している。講習科は，現在は「別科」という名称で，春（4 月）と秋（10 月）入学だが，当時講習科 3 期は，1949 年 11 月 27 日に入学試験が，12 月 6 日夕方入学式が行われている[37]。難波在籍中の 1950 年に学院は中央演劇学校[38]と合併し，本科 1 期生は 70 名近くに膨らんでいる。様々な背景の人が学びにきているため，年齢も多様で，夜間の講習科は教職などについている人もいた。講習科を終えて，さらに本格的に学ぼうと本科に進む人もおり，その後舞台・映画・テレビなどで活躍する俳優や演劇人も多い[39]。

難波は，1949 年から 1955 年にかけて東京で暮らしている。講習科は夜学であり，何か仕事をしながら演劇を学んでいたものと思われるが詳細は不明である。1983 年の新聞記事では，石神井公園近くに住んでいたこと，学院のクラスメートであった梅津栄，藤川昭の３人で「小屋」を自ら建てて生活していたという思い出が綴られている[40]。いったん帰郷したものの，プロの俳優への想いを諦めきれなかったのか，再び上京し，舞台芸術学院卒業生で作った有志の活動や，舞台芸術学院研究所の創設に参加していた。1 度目の帰郷，2 度目の上京，2 度目の帰郷の時期については，難波自身の記述にも揺れがあり，明確な時期は不明である。図書館に寄贈された舞台芸術学院関連の資料と，舞台芸術学院の周年記念誌の公演記録から，少なくとも 1950 年 6 月 25 日の講習科 3 期の卒業公演[41]，1951 年夏の「動く演劇教室」[42]，1951 年 12 月 21-23 日の中間発表[43]，1952 年 4 月 27 日 26-29 日の本科 2 期生中間発表（「第 2 回勉強会」とプログラムには記載されている）のニコライ・ゴ

ーゴリ『検死官』公演には，参加したと推測される。この中間発表については，県立図書館寄贈資料に公演プログラムがあり，演出が土方与志，キャスト一覧から難波が慈善病院長役だったことが確認できる。また，プログラムには配役変更の鉛筆の手書きメモなども残っている。

1952 年 4 月 17 日，鳥取市中心市街地は大火により大きな被害を受けた。当時 12 歳の信之氏は，家財搬出の応援のため，難波が市内に出かけた記憶があるという。「だから大火の時は，叔父は鳥取に帰っていたと思う」と語る。一方難波自身の「大火・家の借金と不幸が続き昭和 27 年に帰郷」[44] という言葉をその通りに受け取れば，また配役まで決まった上演直前の公演をキャンセルして帰郷したとは考えにくいため，最初の帰郷は中間発表が終わった 4 月下旬以降ではないか。その年の 11 月 3 日に行われた本科 2 期生の卒業公演については，公演プログラムもなく，大火後に帰郷したとすれば，これには参加していないのかもしれない。時期は確定できないが 1952 年ごろ帰郷した難波は，1951 年に活動を始めていた「NHK 鳥取放送劇団」の活動に参加している。「放送劇団」1 期生だった前田翠氏は，当時「放送劇団」を指導していた NHK プロデューサー岡本愛彦から，今度東京で本格的に演劇を学んだ人が「放送劇団」に入ってくると告げられたことを記憶している [45]。難波が所蔵していたラジオドラマの台本を見ると，1952 年夏頃から 1954 年ごろにかけてラジオドラマに出演していたことが確認できる [46]。「放送劇団」は，ラジオ番組の声だけの出演に飽き足らず，1952 年 7 月 21 日第 1 回の舞台公演『おふくろ』を上演している。難波のスクラップブックの記録には，難波は演出と装置を担当したと記載されており，出演者関係者の集合写真にもその姿がある。

1 度目の帰郷後，難波が鳥取で何か仕事をしていたのか不明だが，「放送劇団」へ参加したり「集団」の公演を観劇するなどしながら，自身の演劇への情熱をなだめながら過ごしていたのだろうか。信之氏によれば，そんな難波のところへ誰か演劇仲間が，東京へ戻ってきてほしい，と訪ねてきた記憶があるという。舞台芸術学院では本科 2 年の学びを終えた後の受け皿として学院専属の劇団を作ろうという機運が高まり，特に本科 3 期の卒業生らが中心となって，1953 年に「舞台芸術研究所（舞研）」が結成され活動をしていた。1954 年に舞台芸術学院側から正式に学院附属の劇団を設置したいという意向が示され，この「舞研」は解散し，改めて「舞台芸術学院附属研究所」を創設することになった。雨雀の日記によれば，1954 年 12 月 29 日に正式に「舞研」は解散 [47] し，1 期から 4 期の卒業生を中心に新たな附属研究所（すなわち，学院附属の劇団）が 1954 年 1 月 23 日に発会している。また，1956 年 5 月からは「舞芸座」とも呼ぶようになった [48]。難波の資料には，「舞研」最後の公演となった 1954 年 12 月の「舞台芸術研究所第 2 回発表会」の公演プログラムがあり，難波はチェーホフの「熊」で従僕の老人ルカに配役されている [49]。研究所はこの年，各地での上演活動も行なっている。難波の資料には新しい研究所の規約に関する草案（B4 サイズ 2 枚のガリ版印刷で，鉛筆の書き込みがある）も残っている。難波はおそらく，舞台芸術学院専属の劇団立ち上げを契機に，再び上京したのではないだろうか。1955 年 4 月 30 日発行の附属研究所第 1 回試演会プログラムには，舞台公演のキャストに難波の名前はないものの，裏表紙に記載された「附属研究所連名」には名前を連ねている。同年 7 月 9 日に，附属研究所の第 2 回発表会が行われ，難波はモリエール作「亭主のやきもち（スガナレル）」のコルジビユヌ，中沢とおる作「明日を告げる鐘」小野久蔵役で出演している [50]。

具体的な契機は不明だが，東京での演劇活動を諦めて，1955 年から 1956 年の間に難波は再び帰郷し，その後は鳥取に腰を落ち着けることになる。

3．「第 2 の青春時代」が始まった

帰郷後 1956 年 10 月，難波は日ノ丸自動車に就職し，1985 年の定年退職までバスガイド育成に携わった。1950 年代は，バスガイドや運転士の技術を競うコンクールが，盛んに開催されていた。日ノ丸自動車もこうしたコンクールに参加，1953 年 2 月 3 日に開かれた中国地方第 3 回バスガイドコンクールでは，重原和子が 1 位に入賞している。その後も毎年好成績を収め，難波の就職後 1958 年 3 月の第 8 回全国大会では，宇佐美朋子が優勝しており，会社の名声を高めた [51]。1951 年から始まったバスガイドコンクール全国大会は，交通事業者における労使関係が厳しくなり，1960 年の第 10 回を持って終了するが，バスガイド育成は，難波にとって演劇に必要とされる様々な技術と経験が活用できた仕事だったと思われる。発声，朗読，観光案内のセリフ表現，歌，人前での立ち方など，俳優訓練と共通するものが大いにあったはずだ。信之氏によれば，名所案内などガイドが話す内容を，難波がバスガイドそれぞれの個性に合わせて書き，聞かせてくれたその内容もとても面白かったと話す。演劇や映画でいう「あて書き」だ。演劇と通じる要素を持ったこの仕事は，難波に

はうってつけであったと思われる。1985 年定年退職のパーティーで，90 人近い教え子のバスガイドたちを前に難波は，日ノ丸自動車での 30 年間は自身にとって「第 2 の青春時代」だったと語っている。

勤め人となった一方で，鳥取に腰を据えると，難波は「放送劇団」の音声放送と舞台公演に打ち込む。1965 年の「放送劇団」解散後は劇団「鳥取市民劇場」を立ち上げ，亡くなるまで代表を務めるとともに，様々なアマチュア演劇活動に携わり続けた。帰郷後の活動については次稿で詳述するが，難波が帰郷を決意する時に，「放送劇団」や「集団」の存在は一つの拠り所となったのではないかと想像する。難波自身がそのことについて触れた文章を一つも確認できていないが，実は，難波の長兄・文男は「集団」の創設時メンバーの一人でもあった。鳥取で中学校教員として勤務しながら，ラジオドラマにも，「集団」の舞台公演にも出演している。文男がどのような動機で「集団」に参加したのかは分からないが，難波は旧制高校在学中も，兄の演劇活動を知っていたであろうし[52]，東京からいったん帰郷した時も，「集団」の公演に足を運び「放送劇団」にも参加している。プロの俳優を諦めたとしても，仕事をしながら，舞台に立つことができるという具体的なモデルが身近にあったことは，難波にとって一つの希望だったのではないだろうか。

Ⅴ．アマチュア演劇を生きる

本稿前半でみたように，鳥取県立図書館に寄贈された難波の膨大な資料は，高度経済成長期から 1990 年代初めまでの鳥取（主に鳥取市）の演劇活動を考える多様な観点を提供してくれる。これらの 1 次資料を手がかりに，今後以下の論考をまとめていきたい。①まずは，難波が代表を務めた劇団「鳥取市民劇場」の足跡をたどり，その演劇活動の特色を把握するとともに，当時の地域の文化環境における意義と役割を検討する。次いで②鳥取を素材にし，鳥取の人が執筆し，広く鳥取市民が上演に参加した創作劇の活動，つまり「市民劇」[53]の取り組みについて，運営組織，上演内容，活動の変容を跡づけながら，演劇活動として，また市民活動としてどのような意義があったのかを考察する。さらに，③青年団の演劇公演や，アマチュアの女性たちの朗読グループ「ひまわりの会」など，難波が関わった演劇活動を中心に，鳥取におけるアマチュア演劇の足跡と広がりを把握することを通じ，地域における演劇活動の意義を改めて考察する。

鳥取県立図書館に寄贈された資料は，難波忠男という人の演劇に対する執念と粘り強さを示している。スクラップブックのほか大量の紙資料は，帰郷後に携わった大小様々の演劇活動についてあらゆる資料を残しておこうとしたエネルギーそのものである。新聞記事はきれいに切り取られて，丁寧に糊で台紙に貼ってあるのだが，分厚い台本や雑誌も，収支のノートも，そのまま大胆にスクラップブックにテープで貼られている。自身の関わった演劇活動の足跡を一つ残らず記録に留めることで，演劇人としての存在証明をしようとしたのではないだろうか。

小学生の頃に人前で演じる楽しさに目覚め，いったんはプロを目指して上京するも帰郷，その後鳥取でアマチュア劇団の代表として，終生舞台から離れることなく演劇一筋の人生を送った難波。「市民劇場」の公演プログラム挨拶では，「稽古に人が集まらない」「稽古場所がない」「稽古ができない」と難波は毎回ぼやいている。劇団員の大半にとっては趣味の活動であり，結婚，出産，子どもの成長などそれぞれのライフステージの変化もあり，例えプロであっても，そもそも劇団による継続的な演劇活動は非常に困難である。難波の 2 回の上京と帰郷の経緯や詳細について，今となっては詳細を知る手立てはないが，残されたスクラップブックや難波自身が断片的に綴った文章からは少なくとも，挫折や鬱屈した思いは感じられない。難波は，演じる面白さを鳥取の仲間たちと分かち合うことに，その静かな情熱を最後まで注ぎ続けたように思われる。

謝辞

本稿は，JSPS 科研費 JP18K00236 の助成による研究成果の一部である。鳥取県立図書館郷土資料課には，「難波忠男氏寄贈資料」調査について様々なご協力・ご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。また，インタビュー調査に快く応じてくださった関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

注

1　第 45 回公演は，鳥取市文化センター大ホールで，1 月 26 日（土），27 日（日）の 2 回上演された。

2　本稿は，演劇を職業としない「アマチュア演劇」を主たる対象としており，プロの劇団として 2005 年から鳥取で劇場運営と演劇活動を実践する NPO 法人鳥の劇場についてはあえて言及していない。

3　科研費研究課題基盤（B）17H02302「日本の地域素人演劇の包括的研究」の研究成果として刊行されたもの。筆者も研究分担者の一人として高齢者の演劇活動について寄稿した。

4　日比野(2022)pp.8-15。
5　砂川哲夫（1993）p.18。
6　公演プログラムなどに記載されている「芝居屋でこにた」が正式名称と思われる。
7　鳥取の文芸同人誌『断層』メンバーであり，日本海新聞に公演評を執筆する他,「市民劇」などの創作劇に参加している。
8　大倉克敏（1993）p.21。
9　参加劇団名，結成の目的は，1974 年 11 月「第 1 回鳥取演劇連盟文化祭」プログラムによる。
10 映像資料（VHS ビデオ）についても記事中で紹介されているが，本稿では具体的な内容に触れないため，次稿以降で言及することにしたい。
11 鳥取県立図書館で整理済みの資料は，貸出可能な図書・雑誌資料の「難波氏寄贈図書一覧」の他,「難波氏寄贈資料リスト」があり，台本，雑誌掲載シナリオ，その他，新聞スクラップ，スクラップ（その他）に分類，リスト化されている。
12 未来社刊「未来劇場シリーズ」全 117 巻のうち 115 巻分,『アマチュア演劇－一つの方法』(1976 年・社団法人横浜演劇研究所）などがリストに含まれていない。
13 後に『しんげき』,『Les Specs』と改称して刊行され，1992 年に休刊した。
14 最初の 2 冊は，まだこのような分類がされておらず「雑」というタイトルがついている。
15 難波の舞台芸術学院在学中のものと思われる「中芸」ニュース，劇団「東京小劇場」の公演プログラムも含めた。
16 珍しいところでは,鳥取のライオンズクラブが 15 周年記念に会員自らが歌舞伎「勧進帳」を上演した公演のプログラムがある。
17 1990 年代に「芸術文化振興基金」「企業メセナ」などによる文化事業への助成が充実し始め，旧自治省の外郭団体（財）地域創造の設立が 1994 年，文化芸術振興基本法の成立が 2001 年である。
18 難波の家族構成やきょうだいについては,忠男の甥(長兄文男の長男）にあたる難波信之氏よりお話を伺った（2021 年 12 月 20 日)。また，舞台芸術学院時代，東京在住時代の演劇活動については，難波が残した資料と学院が発行した周年記念誌をもとにしたが，難波自身の発言と，これらの資料から分かる情報に相違もあり，特に東京での具体的な演劇活動の内容と時期については確定できなかった点が多い。
19 『昭和 17 年　鳥取縣学事関係職員録』(p.229）によると，社団法人鳥取県教育会主事となっている。
20 1937 年に原作古川緑波，脚本菊田一夫で映画『歌う弥次喜多』が公開，翌 38 年にはマキノ正博監督，片岡千恵蔵主演で『弥次喜多道中記』も公開されており，当時人気のある演目だったのかもしれない。また難波（1993）は「舞踊劇」とも書いていおり，前者の「歌う弥次喜多」を真似たものだった可能性もある。
21 難波（1993）他，様々な自己紹介で繰り返して語っているエピソードである。
22 1998 年 8 月 15 日にわらべ館のイベントホールで開催されたもので，難波没後に「市民劇場」代表を継いだ伊藤げん氏より提供を受けた映像資料で確認した。
23『鳥取西高同窓会名簿』(1965,p.180）では，昭和 19 年 3 月卒業（56 回生）と記載されているが，難波本人は昭和 20 年 3 月卒業と書いている（『鳥取県人名録』など)。
24 第 25 期は，文科 4 クラス，理科 6 クラスで，翌年からは文科 2 クラス，理科 4 クラスと少ない。(『嵩のふもとに』p.13)。
25 前掲書 p.134。
26 1922 年の開校時より，学生は入学と同時に「校友会」に所属することになっていた。校友会は，運動部と文化部に分かれており，文化部の中に文芸部，講演部，音楽部があり,そのほかに非公式のクラブとして絵画，映画，史跡，川柳，謡曲などが結成されていた。同窓会誌や校史の「校友会」に関する記述に，演劇部の活動は見つけられなかった。
27 前掲書 p.368。菊池らの演劇部（演劇研究会）の他に，『旧制松高物語』(p.128）によれば 23 期生文科の学生らが戦中に「演劇クラブ」というサークルを結成，大阪・京都に歌舞伎などを観劇に出かけ,「忠臣蔵」の稽古をしていたという記述がある。
28 「みづほ劇団」は，敗戦後すぐ 1946 年 1 月に結成された。松江東宝支配人の田所龍一，大映監督の島耕二が公募で集めた俳優志望の若者たちのために，演劇を学び上演する組織として「みづほ演劇研究所」を作った。(池野 1977，p.120)
29 主人公のカール・ハインリヒを演じた 25 期理甲三組の福田秀美が，卒業後演劇の道に進み劇団民藝に所属している。
30 『旧制松高物語』p.151。
31 難波（1993）による。「自由席＜１＞」(1994 年 9 月 7 日付新聞記事）では「3 年間に 8 公演というスケジュールで」と難波自身が書いている。何れにしても年に 2，3 回の公演は確かに多い。
32 「ひと“変身願望”を満たす／アマチュア演劇に打ち込む　難波忠男さん」(1984 年 9 月 19 日付新聞記事）には,「役所勤めを捨てて上京」とあり，前掲記事「自由席＜１＞」に「父を説得するのに丸 1 年を費やして」とある。

33 毎年，旧制松江高等学校からは 70 人から 100 人程度の学生が京都大学に進学していた。(『嵩のふもとに』p. 136)

34 各種学校の認可が降りたのは開校後 1949 年である。

35 『15 年の歩み』p. 18。

36 『舞台芸術学院　50 年の歩み』pp. 273-291。戦後の混乱，校舎の火災もあって，所属学生が何年に卒業したかの確認は難しい。

37 秋田（1966）pp. 198-199。開校当初は，学院の不安定な運営体制，レッドパージ，中央演劇学校との合同問題などあって，入学・卒業時期もまだ一定していなかったようだ。

38 『15 年の歩み』pp. 16-18。学院創立の少し前 1948 年 8 月に日本青年共産同盟文化部が創設した，修業年限 4 年の俳優養成学校で，講師陣は学院とほぼ共通していた。

39 難波が学んでいた頃だと，中央演劇学校と合併した 1 期にいずみたく，津上忠，2 期に広渡常敏，北村昌子，梅津栄，3 期に坂本長利，砂田明などの名前がある。

40「わたしのアルバム」（1984 年 5 月 24 日付新聞記事）では，「学院で 3 年学び，昭和 28 年に帰郷，その後再び上京しグループ活動をして，昭和 31 年に帰郷」と難波のプロフィールが紹介されている。しかし「放送劇団」のラジオドラマ台本，信之氏の証言，難波が残した学院関係の公演プログラムなどとは齟齬があり，実際は 1952 年（昭和 27 年）秋頃帰郷，1955 年（昭和 30 年）末ごろ 2 度目の帰郷をしたのではないかと思われる。

41 講習科 2 期を修了した研究科と合同で行われており，難波ら講習科 3 期生は風見鶏介作「夜学生の四季」，山田時子作「良縁」を上演している。難波がどちらに参加したかは不明。

42 『15 年の歩み』pp. 18-19。学院の学生が，福島，新潟，佐渡，長野など地方を巡回して，演劇作品（2 期生は木下順二作「彦市ばなし」ともう 1 作品）とともに，学院の基礎訓練などを持って，地方の高校や青年団団員に見せる。新劇の啓蒙的な考え方に影響を受けつつ，演劇を地方都市に持って行くことで，演劇実践を重ねると同時に，普及活動を行うというものであったようだ。難波は，スタッフ（舞台監督）として名前がプログラムに掲載されている。

43 前掲書 p. 15。阿坂卯一郎作「亀裂」，秋田雨雀作「国境の夜」，原源一作「裸の土」を上演したとあるが，難波の出演は不明である。

44 「この人　難波忠男さん」（1988 年 9 月 9 日付新聞記事）。

45 2021 年 9 月 15 日，前田（旧姓松岡）翠氏よりご教示いただいた。

46 伊藤げん氏が保管していたもの。ラジオ放送のための台本で，放送予定年月が記載されているものが，1952 年 5 月から 1972 年 3 月まで 87 件ある。表紙に難波のサインが記され，配役の記載や内容にメモ書きがあるものは，難波が出演した放送と思われるが，メモもサインもない台本も混じっている。

47 秋田（1966）p. 457。

48 『15 年の歩み』p. 43。

49 秋田雨雀はこの公演プログラムに挨拶文を寄せ，日記で言及するも公演には足を運んでいない。プログラムの挨拶も，頑張ってはいるがまだ足りないことが多い，とやや厳しい書きぶりである。

50 難波の東京時代の生活については，学院の演劇活動の他にもアルバイトや舞台への参加があったと推測されるが，寄贈資料には学院のプログラムと，いくつかの東京での演劇公演以外は残されていない。

51 『日の丸自動車星霜参拾年』p. 25。

52 難波の子どもの頃や旧制高校での熱心な演劇活動を知らなかった信之氏は，「叔父（忠男）が演劇をしていたのは，父文男が影響を与えたのだとばかり思っていた」と述懐しているくらいなので，難波も文男の活動のことはよく知っていたはずだ。

53 「市民劇」という呼称が使われるようになったのは，1982 年の「渇殺・鳥取城」の上演からだが，市民参加による創作劇と捉えると，1978 年上演「ミュージカル湖山長者」も含まれると考える。その後 1985 年「鳥取有情」，1988 年「渇殺・鳥取城のひとびと」「いなばの寝太郎」，1989 年「おとんじょろ狐」，1994 年「共斃社始末」が上演されている。

文献

秋田雨雀（1966）『秋田雨雀日記Ⅳ』未来社

秋田雨雀（1967）『秋田雨雀日記Ⅴ』未来社

朝日新聞社松江市局編（1968）『旧制松高物語』今井書店

舞台芸術学院（1963）『15 年の歩み』

舞台芸術学院 50 周年記念誌編集委員会編（1998）『舞台芸術学院 50 年：俳優教育の歩み 1948-1998』舞台芸術学院

江藤武人編（1967）『翠松めぐるー旧制高等学校物語（松江高校編）』財界新評論新社

日比野啓（2022）「「素人演劇」の現在　様式・教育・コミュニティ」日比野啓編『「地域市民演劇」の現在―芸術と社会の新しい結びつき』森話社 pp. 7-39

日ノ丸自動車創立 30 周年記念事業準備委員(1961)『日の丸自動車星霜参拾年』日ノ丸自動車

池野誠編著(1977)『松江市民劇場 15 周年記念誌　島根の

演劇－人と歴史－』松江市民劇場
石黒武顕編（1942）『昭和 17 年 鳥取縣學事関係職員録』鳥取県教育会事務所
校史「嵩のふもとに」編集刊行委員会（1990）『嵩のふもとに ： 旧制松江高等学校史』旧制松江高等学校同窓会
松江歴史館編（2021）『旧制松江高等学校－松江で学び，暮らした学生たち－』松江歴史館
難波忠男(1993)「舞台をつくる愉しさ」鳥取市社会教育事業団『鳥取文芸第 15 号　特集鳥取の演劇』pp. 7-9.
小川史（2021）『一九四〇年代素人演劇史論　表現活動の教育的意義』春秋社
奥田信義編輯（1936）『帝國現代人物誌續編』東亞出版協會
大倉克敏(1993)「鳥取の若き演劇グループ　「キホーテ」・「でこにた」など」鳥取市社会教育事業団『鳥取文芸第 15 号　特集鳥取の演劇』pp. 21-25.
須川渡(2021)『戦後日本のコミュニティー・シアター　特別でない「私たち」の演劇』春秋社
砂川哲夫（1993）「演劇を外せば私の人生はない－鳥取演劇集団四十七年の歩み－」鳥取市社会教育事業団『鳥取文芸第 15 号　特集鳥取の演劇』pp. 14-20.
鳥取県人名録刊行委員会・旬刊政経レポート（1987）『鳥取県人名録』山陰政経研究所
鳥取県立鳥取西高等学校同窓会編（1965）『鳥取西高同窓会名簿　昭和 40 年度』
鳥取市社会教育事業団（1993）『鳥取文芸第 15 号　特集鳥取の演劇』
＜新聞記事＞
「演劇グループの歩み　舞台盛衰記」掲載期間 1980 年 9 月 23 日～1982 年 6 月（連載 90 回）日本海新聞
「舞台にかける夢　地域演劇の半世紀」掲載期間 1998 年 5 月～10 月（連載 23 回）日本海新聞
「県立図書館に寄贈／故難波さんの膨大な演劇資料／舞台写真，パンフ，ビデオ，本・・・・」1998 年 11 月 12 日付日本海新聞
「わたしのアルバム 鳥取市民劇場 難波忠男さん」1983 年 5 月 24 日付新聞記事（スクラップブック『山陰関係 35』p. 29）
「ひと “変身願望”を満たす／アマチュア演劇に打ち込む　難波忠男さん」1984 年 9 月 19 日付新聞記事（スクラップブック『山陰関係 41』p. 19）
「この人　難波忠男さん　演劇の道一筋の人生　市民劇「いなばの寝太郎」で主役となる」1988 年 9 月 9 日付新聞記事（スクラップブック『いなばの寝太郎』p. 46）
「自由席＜１＞　難波忠男　拍手喝采／学芸会で経験し快感」1994 年 9 月 7 日付新聞記事（スクラップブック『山陰関係 67』p. 25）